

ヘルシンキ

目をあけるとベッドサイドのテーブルの側面のデジタル時計の数字が505と読める。起きるのにはまだ早い。スタンドの小さなランプが隣りのベッドをほのかに浮き上がらせている。あちらを向いた多聞の広い背中が夜具から乗り出している。ベッドカバーもめくれたままである。

私は起上りベッドを伝いながらシャワールームの方に向った。ドアは注意しても閉まる時には音がする。でも私は気にしない。多聞は耳が聞えないのだから。用を足して戻って来た私はしばらく腰かけて多聞の背中を見ていた。

広い怒り肩、毛の薄くなったが均整の取れた頭の形、兄弟の中で多聞が最も亡くなった父親に似ている。多聞はこ

の春六九才になる。音のない世界に我慢強く生きて来た。その我慢強さが彼を今まで支えてきたのだが、時には強情にも見えて、私をいらいらさせる。

今回は旅の服装についてだった。一月三日からデンマークからフィンランドへの十日間の旅である。旅行会社の深井さんからも日程表や訪問先の資料などが何回か届いた。

「あのね、スポーツのお店で冬山登山やスキーに行く時の服や下着を買いといてよ」私は娘の由祈の意見をそのまま多聞に伝えた。彼はその度に胸を叩いて「わかった」と頷いていた。だが出発の前日トランクをさげて現れた彼は、新しく買ったのは靴と少し厚めのズボンだけだった。下着

上杉 文代

もセーターも着古した物である。「外套は？雨や雪が降ったらどうするの？」と焦る私に彼はビニールのフード付きのコートを示すのである。「駄目よ、北欧は零下よ、私たち経験した事のないほど寒いよ、寒いというより痛いらしいよ」私はそういつて旅行社からの説明書を取り出した。「ほら耳も隠れるような帽子って書いてあるよ」彼はふんふんと頷きそして右手を左の胸から右へと移動させて「大丈夫」の手話を繰返すばかり、一向に驚かないで笑っている。彼がこの「大丈夫」を繰返す時、こっちの意見は入らないのだ。太い毛糸で編んだハイネックのゆったりしたセーター、中綿の入った外套を着せてやりたいのに。彼の妻も耳が聞えない。娘の榮里に電話してみると「私もお母さんも言ったんだけど、お父さんいつも服装のことは絶対聞いてくれないんよ」と困っている。私は亡夫のセーターと毛糸のマフラーを無理矢理彼のトラंकに詰めた。

今度の旅行は関空と成田に分れてフィンランド航空で出発する。私たち関西空港組は九人。旅行社の深井さんが大阪で前泊してくれていた。集ってみると多聞の格好は貧相だった。私は深井さんに「向うに着いたらどこかで外套を買ってやりたい」と耳打ちした。

ところがなんと北欧は暖冬だったのだ。七時間時計の針

を遅らせて、ヘルシンキに近づいた時、地上に見える林の中に白い雪が見えるだけであり、想像していた白銀の大地ではなかった。ヘルシンキの空港で三〇分ほど待って成田から発ったグループと合流した。団長の花部夫妻もしつかり旅支度をしている。北欧の障害者の福祉と、教育を訪ねる旅の十七人はコペンハーゲンへと移動した。デンマークでも雨には会ったが雪は降らなかった。

私たちは予定通りデンマークでの五ヶ所の訪問を終え、一月七日再びヘルシンキ空港に戻った。市内に向うバスの中で出迎えてくれた通訳の女性がヘルシンキでは百五十年ぶりに雪のないクリスマスだったと語った。

地下鉄のある駅の近くのホテルに四泊した。その駅ビルのフロアーにはまだ大きな樅の木のカリスマスツリーが幾本も立っていた。円い大きな吹き抜けには直径一メートルもあろうかと思われる赤い玉がいくつも宙吊りされ、縄のれんのようなシャンデリヤに輝いている。だがその華やかさが雪のない雪国を何か淋しく感じさせた。雪の中でこそこの豪華さが似合うだろうに、これではサンタクロースが橇に乗って来られない。

確かに地球がおかしくなっている。そして日本という国もおかしくなっている。だから私は手首を骨折してまだ左

手は痺れている。一月前には尻餅をついて尻を打った。長時間の飛行に耐えられるか心配だった。でも私は旅をキャンセルしなかった。政府が捨てた教育基本法が活かされているというフィンランドの教育を見たかったからだ。鬼になっても北極に近い国にやって来たのだ。

多聞はまだ眠っている。デジタル時計の数字は6に移った。私は立ってカーテンを少しあげた。外は一面の闇にビルのネオンが赤く窓を描いている筈だった。だが今朝はちがう。すべてが白く流れるものに覆われている。雪だ、雪が降っている。やつと雪が降って来た。旅の終わりの朝に。私は思わず多聞の背中を叩いてしまった。

二人は興奮して暫く雪をながめていた。雪は消えずに積っていくようである。私はすぐに多聞の薄着が心配になった。「外は寒いよ、セーター厚いのと着替えなさい」だが多聞はベッドの上でトラंकを開けるとワイシャツだけは厚いのと着替えたが私が入れたセーターは着ない。「大丈夫」の手話を繰返している。「強情っぱりめ」と私は腹を立てながら、マフラーだけを引っ張り出して彼の反対を押し切ってリュックの中にねじ込んだ。トラंकは一応フロントに預けて十時からチェックアウト、午後二時までは自

由行動の予定だった。

自由行動といっても車椅子の私は自分だけで動くわけには行かない。私は旅の日程がこなせた事だけに満足していた。この国での訪問先は六ヶ所、その最初の小学校で、私たちは日本の教育基本法の精神が実際に活かされている姿を見た。八十二才の耳の遠くなった私が完全に聞えない弟と共にそれを見た。鬼になって来たつもり冬の北欧で、心に灯火をともして帰る事が出来る。それで充分であった。だが多聞はどうだろう。彼は一度見た所はよく覚えている。他のメンバーのようにちよつとした自由時間に駅ビルの中を歩き廻ったり、ヘルシンキ中央駅の写真も撮って来たりしているのだからと思いつつも、ふと尋ねてみた。「ね、今日の自由時間、何処か行きたい所ありますか」彼は一寸考えていたが嬉しそうに手を打った。両手の人さし指と親指で輪をつくり、それを二回からませた。

「えっ、それ何、」彼は声も出している。

「あつオリンピック！」わかった。私は胸を叩いた。彼はさらに言葉をつないだ。

「ヘルシンキ、オリンピック会場」

ああ、成程、ヘルシンキオリンピック。二日目の訪問先からの帰途、バスが林の傍の道を走っていた時、通訳の

言葉で、左手の窓から見えた広場をあわてて振り返って見た、それがオリンピックのグラウンドの跡地だった。

「そこ二日前バスから見えたよ」と言う

「私は知らなかった」と彼の顔が暗くなった。瞬間に通り過ぎたから通訳が間に合わなかったのだ。女性ガイドもたいては案内の必要を感じていなかったのだろう。

「見たいです。ヘルシンキオリンピックの場所見たいです」

多聞の広い額に筋が立った。困った事になった、と私は思った。おそらく誰も自由行動にそこを選ばないだろう。雪が降っているのだ。

「深井さんに相談しよう」と言うとは彼は烈しく手を振った。目立ちたくない。みんなに迷惑かけたくない。そのくせ

「もう二回もヘルシンキに来ることはない。今見ていかないと生涯見られない。もったいない」と手話は独り言のように繰返している。独りでも行きかねない。

早めに食堂に降りて娘の由祈に相談した。由祈はフロントでタクシーでどのくらいで行けるか尋ねて来た。とにかく多聞が独りでタクシーに乗る時のために必要な英会話をメモし始めた。ここは英語が通じるのだ。

九時前一行はロビーに集りチェックアウトし、トランクを預けた。外はまだ暗く雪は降り続いている。それぞれに

耳も隠れる帽子を被り厚い外套を着込んでいる。私は由祈が用意して来た下半身も隠れる外套にくるまれている。多聞は背広の上にフード付きのビニールの雨具を着てマスクをかけている。私は彼の背中のリュックを叩き、「外に出る時、マフラーを」と合図した。彼は相変らず「大丈夫」の手話を返してくる。それよりも由祈が英語と日本語でメモした紙切れに見入っている。

十時から午後二時までの自由行動をどうするか、二、三人ずつ集って話し合っている。やはりばらばらに行動するのが不安なのだ。深井さんと相談していた団長の花部さんが立ち上って言った。

「近くの市電の停留所から市内一周の観光専用の電車が出ているそうです。結構時間が充実にますよ」「さんせいー」女性群は声を上げた。由祈はすかさず「それオリンピックスタジアムの近くを通りますか」と叫んだ。深井さんは「近くに停留所ありますよ」私は車椅子を廻してKさんの傍へ寄っていった。Kさんは私たちの町に障害者の作業所を創って来た仲間だ。今回初めて時間を工夫してツアーに参加してくれた。Kさんは手話が出来る。「多聞がねオリンピックの跡を見たいと言うの」と言いかけると終りまで言わずに「ああそうか僕一緒に行くよ」と笑顔で言

ってくれた。Kさんは本当に優しい。

多聞にとってなんとラッキーな事態になったことか、一緒に行動できる事になってみんなも元気づいた。毛のついた襟や帽子で着ふくらんだ一同はホテルを出た。多聞は由祈が二つ持ってきた皮の手袋をさして私の車椅子を押してくれる。雪は停留所のガードレールにも積っている。やがて観光電車(トラム)が二両連結でやって来た。トラムはやたらと揺れながらゆっくりと進む。

街が雪にかすみ、裸の樹が白くなり、雪をつけた針葉樹の林が近づくと深井さんが「次だよ」と合図して来た。多聞とKさんは降りた。すると「私も降りる」と埼玉から来た元高校の教師のSさんも人をかき分けて降りた。地面が見えない白い道端である。流れるように降る雪の中を上体を倒して進む三人の姿はやがて消えた。

ヘルシンキオリンピック、それは五年前の世界の祭典である。Kさんはまだ生れていない。Sさんもまだ小学生だっただろう。私は何の記憶もないのに、多聞はどうして行きたがるのか、私は多聞につき合ってくれる二人に申し訳ない思いがした。

トラムはゆったりとガタビシと市内を一巡した。海があり公園があり、美術館がある。丘の上に聳える円い屋根に

尖塔のついたロシア正教の寺院は、寺院というよりお城のように偉容があった。千畳敷のような石畳の広場にロシヤ皇帝アレクサンドル二世の立像がある。この国はロシヤに長く支配されていたのだ。独立したのは一九一七年、革命でソ連が生れた年だった。まだ九十年たったばかりである。

出発点に戻ると、それぞれに別れて好きな処で昼食をとる事になった。私たち由祈と義妹の三人は駅ビルの中の書店に入った。お土産に学用品を買いたかったのだ。だがノートも鉛筆も置いてなかった。フロアーは広く二階にはカフェもあった。私たちはそこでゆっくりと暖かい昼食をとった。駅ビルで由祈が気づいた事は行き先の標示がすべてフィンランド語とスウェーデン語である事だった。ロシアに支配される前はスウェーデンにも支配されていたのだ。

ホテルに帰ると次々と仲間が集って来た。多聞たちも帰って来た。「やあー」と多聞は軽く手をあげた。よほど満足したのだろう。明るい顔に笑窪さえ浮んでいる。今は面長だが少年の頃の多聞はふつくと丸い顔の両方のほっぺたにくっきりと笑窪があった。仲間が彼につけたニックネームは「笑窪」だった。人さし指で頬を突いて親指を立て

る。「笑窪の男」の手話である。私の事を親指の代りに薬指を立てて「笑窪の姉」と表現しているらしかった。

私はKさんとSさんに頭を下げた。二人は手を振って笑った。それよりも預けたトランクを受け取り空港行きバスに積み込まねばならない。私と他の一人の車椅子の女性はリフト付きのバスに乗せられた。多聞と由祈は私に付き、もう一人の女性が車椅子の介助についた。

空港で荷物を預けチェックインの後、搭乗まで時間がある。タックス・フリーの店で最後のユーロをしようとする人々は群がっている。多聞は娘の榮里に頼まれたキシリトール（虫歯予防の甘味剤）入りのガムを由祈と一緒に見つけに出かけた。義妹も何か記念になる物があつたらと思うのだろう。人混みに紛れて行く。私は膝の上にも彼らの荷物を乗せて待っていた。多聞はどんな人混みの中でも時間を守って必ず約束の場所に戻って来る。何処へ行っても彼を探す事はなかった。

午後一七時二〇分予定通りフィンランド航空AY77便関西空港行きは離陸する。私たち関空勢九人はこれに乗った。深井さんは帰りは成田行きに乗った。

由祈は窓辺の席を希望した。モスクワの上空のあたりで

い。そこで語られる音声言語を耳で聴き、自分の内語とした事はないのだから。

多聞がラジオの歌のおばさんの声に聞き入ったのは満一才頃だった。つかまり立ちしていた姿が目につく。彼の脳の聴覚は生きていたが音を伝える器官は手術のために失われていた。一才過ぎに麻疹を患い内耳炎を起こした。高熱のため失いかけた命はとり止めたが耳の聞えない子になってしまったのだ。

幼い多聞の生命は言葉への出口を失ったまま聴覚以外の感覚をすべて使って草や木のように根をはって育った。母は多聞の欲しいもの、したい事をすべて受け容れ、決して駁けようとはしなかった。出来なかったのだ。毎日が方向の見えない闘いだった。しかし多聞は大勢の兄弟、家族の中でそれぞれのする事を見、年とともに自分流に生活のルールを身につけていった。

多聞に教育という営みで言葉の世界が開け始めたのは十才の春だった。ながい戦争の時が終わった。日本は焼土となった。「神州不滅」という強い縛りが解け、土の下に閉じ込められ、眠らされていた人々の声が聞え始めた。受け容れたのが戦争はしない、という新しい国の決まりだった。人の生命は平等に尊いという国の決まりだった。

オーロラが見られるかもしれないという期待からだ。多聞は通路の側、私は真中である。多聞が柵に載せたリュックには円筒が覗いている。オリンピックスタジアムで買ったポスターが入っているのだ。「よかったね」と言うと「自由時間あつて良かった。思いついて良かった」と満足の手話は特に大きい。

多聞は二六才まで六年間東京の亀戸で印刷工として働いていた。東京の聴覚障害者職業訓練所の同期生たちが都内のあちこちで働いていたが大体は地方の出身だった。多聞は特に熊本の青星君と親しかった。青星君は登山が好きで毎夏彼が計画を立て、何人かで南アルプスに登っていた。後年、箱に詰めた記念の品々を見せられた時、ラジオも聞けないろう者たちがよく遭難もせず、怪我もせずに済んだものだと思心しながらも怖くなった事がある。多聞はきつと青星君たちに会う時、このポスターを見せるのだろう。私は単純にそう考えていた。

それよりも今度の旅で気づいた事は多聞の手話が思ったより単純で幼稚だ、という事だった。何時も傍に居てくれるKさんは「多聞君の手話って言葉の達者な中途失聴者の使う手話とは違うね」と言った。そうなんだ、NHKの手話ニュースの手話を多聞は読み取る事は出来るが使わな

その決りが多聞たちを屋根も床もない焼け跡の学校に呼び寄せてくれた。教師たちは聞えない子どもを抱きかかえ、頬や胸に手を触れさせ、自分たちにある声に気づかせた。だがその声は聞えない。聞えない声を口の動きを見て読み取るのだ。これが音声言語を第一とする口話教育だった。

多聞の雑然とした認識は物の名前を知る事によって飛躍したに違いない。第一初めて自分に名前がある事を知ったのだから。しかし多聞の言語は見る言語であった。手術で大きくなった多聞の耳の穴は、まだ癒えきらず湿った耳道に虫など入らないように脱脂綿を詰めておく穴でしかなかった。

寮生活をする多聞には先輩たちから学ぶもう一つの見聞言語があつた。手で語る手話である。だが口話教育の技術を競う教師たちは熱心のあまり、手話を劣悪なものとして禁止した。

「手まねをしたらやいとをすえます」それが多聞のアイデンティティを曇らせた。

多聞は学年が進むに従って廻りの学校の生徒が使う教科書と自分たちの使う教科書の違いに気づいていた。聞えない世界を憎んでいた。ろう学校にある理容科も縫製科も撰

ばず「印刷」を希んだのも聞える世界、活字への憧れであったのだろう。

多聞がもし東京に開設された聴覚障害者職業訓練センターに行かなかったら彼の青春のアイデンティティは曇ったままであつたらう。其処では手話を当然の権利として授業に使っていた。全国から集った多様な個性の青年との出会いが多聞の世界を広げ自己解放の第一歩となったのだと思う。

明りを消した機内に人の声はしない。私は多聞が過して来た長い年月のあれこれを蘇らせていた。彼は印刷工を辞めてから大阪のSろう学校の歯科技工科の技工として昨年の廃科まで四〇年勤めあげたのだ。そして多聞の稚拙と思われる手話を見て湧いて来たらう教育への小賢しい評価を押し鎮めていた。とにかく多聞も自分もここまで生かされて来た。それが大事な事なのだ。私はいま体を寄せ合っている多聞をどれだけ知っているだろうか。彼は彼自身の人生を創って来た。それぞれの人生を乗せたA Y 7 7 便是空を斬る金属音を風のように持続させながら水泳飛行を続けている。

あの夜、多聞の手術に付き添った父は夜遅く帰って来た。

多聞の目的は旅の報告である。団長の花部さんは各自原稿用紙四枚の報告を約束させた。第一のべ切りは一月末なのだ。多聞は文章が苦手だ。思いが昂ぶる程、文章は混沌とする、といって短文の羅列にするほど単純な気持ではないのだ。そんな時、多聞は必ず私の所に現れる。

多聞は何時もの様に少し迷いながらノートを見せた。細かい文字で旅行のガイドブックから写したフィンランドの歴史を要領よく紹介して、何とか格好をつけている。あまり感動らしいものは伝わって来ない。「あのね、あんたが自分で一番良かったとかびつくりしたとか心に感じたこと書けばいいんだよ」何時もそう言いながら私はまず彼と話しあう。一番書きたいのはオーロラ小学校の給食の事とオリンピックスタジアムの事だと解る。

給食は私たちも一緒に食べたのだ。メニューはパンと茹でたジャガイモと魚のミートボールと野菜と牛乳だった。一列に並んで入ってきた生徒は皿を持って自分で欲しいだけ載せて好きな所へ持っていくって食べていた。席も決まっていなかった。先生も給食指導などしない。誰かと楽しそうに話合っている。「そうだったね」「ちゃんと順番に廻っていたね」「大きい子も小さい子も、自分に合うように採ってたよ」二人は共感しながら髪の色色々な男

待っている子どもたちに言った。「多聞の耳の三本の耳小骨は取り出されたんだよ。それを見せられたんだよ」と。暗い庭に飛び出した私は空を見上げた。わが家の屋根の上に、夜明けには遠い唐鉾星が輝いていた。私の脳裡からあの夜見た星の姿は消える事はない。

今私たちはあの星になって飛んでいる。地球も星の一つなのだ。地球より少し離れた空間を飛んでいるという実感が、今まで生きて来た道のりが宇宙を旅した時間のように見えてくる。私はいつか眠りに堕ちて行った。

旅は終わったのだ。私たちの旅の報告はまだなのに「憲法改正」「教育再生」「集団的自衛権の検討」と後向きのかげ声が歯切れよくとび出し、立春が近づいてくる。

予想通り多聞が現れた。私は由祈に捜して貰った「第一五回オリンピック大会報告書」を用意して待っていた。日本体育協会の昭和二八年ヘルシンキオリンピックの翌年に出版した赤茶けた古本である。

多聞は笑窪を見せて喜び手に取ってバラバラとめくった。要所、要所の写真を見ても顔色はするが驚いた表情はない。当時でも二五〇〇円の部厚い本である。持って帰ってゆっくりと見ると言う。

子や女の子を思い浮べていた。感心した事はまだあった。残飯がなかった、と言うのだ。日本の学校では同じ様に給食を分ける。残して捨てる子が多い。もったいないと言う。本当にそれは同感だ。私の勤務したろう校でもそうだった。土曜日まで残ったコップパンを私は何時も母親のいない子の家へ届けたものだ。戦後の寮生活で何時も空腹だった多聞にはコップパンの有難さは身にしてみている。「もったいない」の手話は繰返される。

オーロラ小学校の給食風景を書いた所は殆ど彼の表現で良し、とした。彼はその最後を「私の学校では何時も残飯が一杯です。勿体ないです。残飯のポリバケツを運ぶ車が来ます。オーロラ小学校の生徒は残さずにみんな食べていました。」で結んでいた。

問題はオリンピックスタジアムでの感想だ。良かったか、良かったと言う。でもどんなに良かったのか。その表現が難しい。五五年前、日本の選手行進。感激。現在、過去、等という言葉が行きつ戻りつしている。私はいく加減に想像しながら話しかける。「雪が降って広いグラウンドは真っ白で何もなかったんやね、でも君は五五年前、世界中の選手、日本の選手が行進したこと頭に浮かべてたんやね」私は目を閉じて大げさなジェスチャーをして勝手な想像

をする。多聞もそうだ、と頷きながら、「ぼく小学部五年」と言う。「アコガレ」と私が指文字で示すと多聞は、そうだ、そうだ、と親指と人さし指を何度も合す。その憧れのグラウンドに今来た。嬉しかったんだね、多聞は大きく頷く。

今思った通りに書くといいよ。と言うとまだある、と多聞、「塔があった。エレベーターは三人でいっぱい。せまい。上に上ったけど、雪ばかりでヘルシンキの街は見えない。下に下りてぼくがオリンピックのポスターを買うと、KさんもSさんも買った」それが何よりの記念の多聞である。

スポーツの事は詳しくない私だが、雪のスタジアムで多聞が感動した、と言うことは何となく解る。多聞は何とか文章らしく綴った。あれだけ見たがったのだから、もっと表現する事があるのだらう、と思ったが私は修まりの悪い助詞の位置を少し直しただけで、多聞の文章をあまりいいじらなかつた。原稿用紙に五枚になると彼は責任を果たしてほつとしたように帰って行った。

しばらくして又多聞が現れた。暖かくなった我が家の庭の草を採るためである。私は予定があつて多聞とゆっくり話す時間がなかつたが、多聞に尋ねたい事があつた。どう

と私は尋ねた。多聞は首を振った。十月に隣りの和歌山県立商業高等学校で文化祭があつたのだ。多聞たち寮生は日曜日に自分たちでそれを見に行つたのだ。「文化祭か」私は胸を突かれた。

多聞たちのろう学校は旧第六一聯隊の跡地の一面にある。聯隊本部が校長室や職員室になり鰻の寝床のようにバラックの校舎が延びている。百名の寮生は焼け残つた病舎をそのまま使っている。小学部が義務制になつたばかりで中学部も高等部もまだ無認可だった。広大な練兵場を挟んで焼けた兵舎の跡は新制高校と中学校の広い校舎になっている。練兵場も県和商のグラウンドやテニスコートになっている。ろう学校には十分な運動場もなかつたから、文化祭など思いもよらなかつたのだ。

私は多聞をオリンピックに惹きつけたのは新聞と文化祭の展示だったのだ、と思ひ至つた。多聞はその頃の寮生活を語つた。サンフランシスコ講和条約が成立した翌日の事だ。寮生の朝の集りで「昨日はどういう日だったか」と寮長は尋ねた。多聞は「ハイ」と手を挙げて立ち上つた。「サンフランシスコジョーヤクデス」寮長は「宜しい」と頭を撫でてくれた。多聞は禿げた頭を撫でてその時の姿を実演した。「どうして知つてたの」と言うと、「壁に貼つ

して五十五年前、聞えない多聞がオリンピックに興味を持つことが出来たか、という事だった。多分寮生活の中で先輩のろう者が教えてくれたのだらう、と私は思つていた。それに私自身は何故何の記憶もないのだらう、という事もあつた。

私の予想は外れていた。オリンピックは七月一九日から八月三日までの二週間だったのだ。「夏休み、家にいた。新聞で見た」と言う。えっ！と驚いた。多聞は毎日、朝日新聞を見ていたのだ。「町の本屋にオリンピックの本がある。しげこさんに買って来てほしいと思つた。けど言葉むつかし。」滋子は私の妹である。高校を卒業して隣の銀行に勤めていた。新聞にきつと子ども向けの雑誌の広告があつたのだらう。

それにしても多聞は入学して五年目、朝日新聞が詳しく読めるわけがない。家族は多聞の気持など考えても見なかつたのだらう。私はその時何をしていたのだらう。敗戦の翌年から思い出した肺結核が再発して山の療養所に居たのだ。私が知つたらその本を買つてやれたのに、私は療養所で伝導に來た牧師に導かれて聖書を読んでいたのだ。あの頃療養所でオリンピックが話題になつただらうか。

「夏休み終つて先生にオリンピックの事話して貰つたの」

てあつた新聞を見た」と言う。私はあの病舎の狭い中廊下の壁を思い出した。多聞の情報はやはり目からだった。

次に多聞が來たのは花部さんが集りの遅い原稿をやつと編集した手造りの報告集が届いた三月末だった。彼はそれを持つていそいそとやって來た。一七人のそれぞれの北歐への思いが枚数に拘わらず花部さんの素敵なスナップ写真をちりばめて、手造りされている。多聞の「憧れのヘルシンキオリンピックの国で」の一頁も深井さんと並んで夕食を撮る横顔と共に載つてある。

はにかみながらそれを見る多聞に私はもつと尋ねてみた。事があつた。「ね、和商の文化祭で何を見たの、写真？」多聞は頷くと傍にあつた大会報告集をバツと開いた。

開会入場式の写真である。「十六年ぶりの行進」とある。人で埋つた観客席、整然と並び行進してくる選手団、写真は団旗を倒して中央を進む旗手を中心に捉えている。多聞の指は先頭を歩く人を押さへ「これ古橋」と教えてくれる。聖火の入場と点火、人で埋め尽くされたスタジアムに地球上のすべての旗が平和と親善を誓う、選手宣誓の手が上がつている。平和の象徴である鳩が空を埋めて舞上つている。「この写真みんな文化祭にあつたの」「あつた」と多聞は

言う。新聞にも載ってたのだろう。本を渡した時、懐かしいものを見るように見た多聞の目を思い出した。

多聞は五十五年間、この情景を脳裡に収めて来たのだ。稚拙な手話と共に。あの雪のヘルシンキの何もないグランドの上で多聞はこの入場式を頭に描いていたのだ。多聞の見たスタジアムは空っぽでなかったのだ。

ぼんやりする私をせかすように多聞は「よしのさん」といつて一人の女性を指さした。女子砲丸投げで四位に入賞したという。日本の女子の選手は珍しかったのだ。彼がもつとも自慢げに見せるのがレスリングで金メダルを獲り、表彰台に立っている石井選手の写真だった。一五〇〇米自由形で二位になった水泳の橋爪、八〇〇米リレーでは再び日本水泳チームは二位になり日の丸を上げた。

文化祭ではこうした写真の下で青年たちの話題は賑わっていたのだろう。多聞たち耳の聞えない生徒にも目でその興奮は伝わっていたのだろう。「日本は戦争に負けてお金がないからみんながカンパした。お米を出した人もあった。」多聞はこの本を詳しく見ていたのだ。オリンピック募金のポスターを示した。それは日本向けの大会ポスター、マラソンをする裸体の男子の像の下に森永ミルクキャラメルと書き入れ、オリンピックに選手を送りましょう、と募

金を呼びかけている。

「フィンランドは小さい国、ドイツについたからソ聯にお金も払ったのに、えらいねエ」と多聞は繰返す。そして改めて花部さんから送って来た報告集「KIITOS」を見た。キートス？、多聞は又何かを思いついたようにページをめくって由祈の報告文の最後の四行を爪で示した。由祈は買い物に入った店の人と片言の英語で話し合った後、店を出る時感謝を込めて言った。「キートス」——*This is one word of Finnish I know.*——キートスはあるがとうだったのだ。二人はなるほどと合点した。多聞は又手を打って思いついたように、飛行機の座席からとって来た宣伝誌を取り出した。北緯六十九度の聖なる地の日本語。白い大地に女性と犬と大聖堂の写真のその上に並んだ文字もKIITOSだった。多聞は「同じ」の手話として笑窪を見せた。

そのパンフのハイライトにもオリンピックのスタジアムがあった。ポスターになった走る男の裸の像が高く聳えている。

多聞が帰ったあと、わたしは「キートス」と呟きながら五十五年、空高く走り続けているこの男の像をじっと見つめていた。